



TITLE:

日中に現れた流星

AUTHOR(S):

羽根田, 利夫

CITATION:

羽根田, 利夫. 日中に現れた流星. 天界 1932, 12(137): 313-315

ISSUE DATE:

1932-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162249>

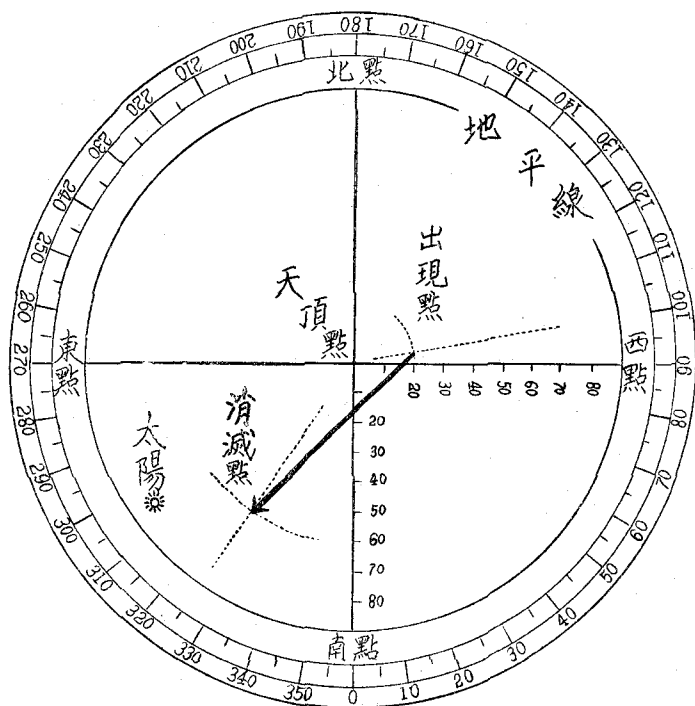
RIGHT:

日中に現れた流星

羽根田 利夫

白い鳥？

昭和六年一月十五日、この日は夜明にアンタレスの月の掩蔽のあつた日だ。朝七時二十五分頃洗面後、傍に聳ゆる アンテナ柱を何心なく見上げた目に、天頂を少し離れた西空を横切り太陽目指して進む白いものが映つた。



おや白い鳥？、さうです、恰も 白い鳥が朝日を満身に浴びて眞白く映え、青空高く眞一文字に翔るが如くに見えたからです。然し直ぐ流星だと気付いた瞬間、私の全神経は俄に緊張して、その白色光の行方をデッと見詰めた。

白日下にクツキリ白色光を放つ

文字通り銀白色の光輝！ あの一ツケルの様なキラキラした光！ 日中流星が見えるかしら？ 錯覚？ そんな氣持が一瞬脳裡を掠めたが、それは全くの

杞憂に過ぎなかつた。いくら見直しても慥に流星、注意して見得る微光ではなく、見上げれば否でも應でも目に映るクツキリした日面同様、青光りする素晴らしい光輝でした。折からの太陽がもう可成りの高さに上り、充分輝いてゐたので最も光の強い部分だけが見えたわけなのでせうが、これが夜間出現したのだつたら随分壯觀を呈したことだらうと思つた。

速 度 は 緩 慢

頭部の幅は日面の三分の一位か、稍紡錘状をなし、長さは日面の直徑大程。それより後に尾が細く延びて、全體の長さは一度半位、尾の方からはシュと盛んに何かを残してゆくかのやうに思はれた。速度は緩慢で、出現點から消滅點に至る六七十度の通過経路を十二秒要したやうでした。

二 つ に 分 裂

もう五十度以上も進んだでせう。ハツと氣付くと二つに分裂して速度は稍早く一つがスーと十度許り進んで消えた直ぐ後から同じ経路を、三四度遅れてもう一つのが同じやうに進んで消えた。その頃南天には雲の一片の様に月が淡い姿を見せてゐた。

出現時刻は七時二十五分三十秒頃

樹木を目標に大體の位置を見定めると、下駄を脱ぐ間ももどかしく室内に飛び込んで時計を見る。走り込む迄の時間を參酌して得た出現時刻は七時二十五分三十秒頃。時計はラヂオの時報によつて合はせてあるので、この時間に一分以上の誤差はあるまいと思ひます。

偶然の一致？ 二三分後大砲の様な音

再び紙と鉛筆を持つて元の場所に来て通過位置を寫し取つてゐた際ドゥーンといふ大きな底力のある音がした。始は別に何とも思はなかつたが、フト或は流星によつて生じた音かも知れぬと考へたので、急いで来て時計を見る。流星後二分半乃至三分位経過した頃のやうでした。

さう思ひ込めば何でもかでも、それに關係あるかのやうに考へられるのが世の常であるから、或は偶然の一致であつたかも知れぬが、遠方で打つた大砲の様で、それが何處の方から聞えたといふ方向も無いやうでした。後で家人に尋ねて見たら「可成り大きな音だつたが、何だらう」と言つてゐた。當地

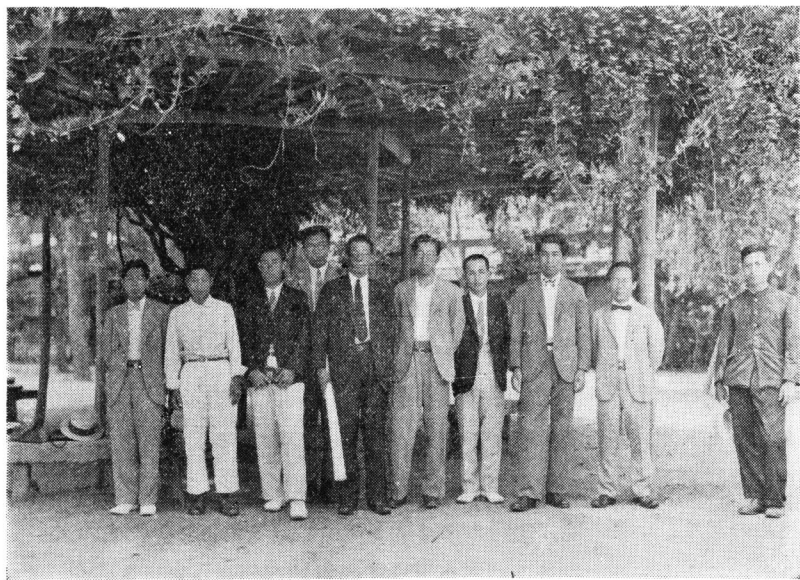
附近では而も朝方斯様な音響の聞える筈がないので、流星と何等かの關係があつたのではないと思ふのです。

出 現 位 置

出現時が日中の爲め星による位置を求めることが出來ず、錘を糸にて釣下げて天頂を得、夜間星に據つて子午線を搜したり、分度器やコムパス木片の組合せで不完全乍ら測定し求め得た大體の位置は、最初の發見點が正西より角度十度程北、天頂距離二十度の邊より南東に飛び、消滅點は正南より角度の三十五度程東、天頂距離六十度内外。

観 測 地 點

観測地の経緯度は、東經百四十一度、北緯三十七度三十五分。（終）



黄道光會議を終りて、石山寺の前庭に
龜井、佐々木、山田、中村、荒木、小山、廣瀬、稻葉、山本、阪元、

編 輯 室 よ り

来る十月號は「オール會員號」といふ新しい試み、又、来る十一月は、獅子座流星群歓迎の意味で、「流星號」とします。

去る八月號の藤原博士の御文は、内容に同博士の御意に滿たざるものがあります由で、責任上御迷惑だとの御通知がありました。それであの文は編輯者の責任と御了解下さい。